教会奉仕者クラス 2017-2018 聖書概観 第1回 旧約① モーセ五書

参考：旧約聖書の年表

- 1 天地の創造／ノアの洪水とその後のバベルの塔の時代辺：～紀元前 2100 年頃迄
- 2 族長の時代／アブラハム～ヨセフの時代：おおよそ 紀元前 2100 年～1850 年
- 3 エジプト滞在時代／出エジプトとシナイの放浪：おおよそ 紀元前 1850 年～1400 年
 - A エジプト滞在：紀元前 1850 年～1450 年 ⇨ B シナイの荒野放浪：紀元前 1450～1400 年
- 4 カナンの地征服 ～ 士師の時代：おおよそ 紀元前 1400 年～1050 年
 - A 征服と定着：紀元前 1400 年～1350 年 ⇨ B 士師の時代：紀元前 1350 年～1050 年
- 5 王国の時代：紀元前 1050 年～586 年
 - A 統一王国の時代 紀元前 1050 年～931 年 ⇨ B 分裂王国の時代 紀元前 931 年～586 年
 - ユダ・イスラエル両王朝時代：紀元前 931 年～722 年
 - ユダ単独王朝時代：紀元前 722 年～586 年
 - ◆ アッシリヤによる北イスラエル王国の滅亡：紀元前 722 年
 - ◆ バビロンによる南ユダ王国の滅亡：紀元前 586 年
- 6 バビロン捕囚時代：紀元前 586 年～536 年
 - ◆ バビロンに捕囚となり、クロス王による解放令 536 年
- 7 祖国復興の時代：紀元前 536 年～400 年頃
 - ◆ バビロン捕囚からの帰還と、祖国の復興
- 8 中間時代：紀元前 400 年頃～キリストの誕生（紀元前 4/5 年頃）
 - ◆ ペルシャ時代 ⇨ ギリシャ時代 ⇨ ローマ時代

第1章 創造と堕落 ～ 創世記 ① 天地創造 ～

1 - 1 聖書全体の導入 ^[3] 7-19

『はじめに、神が天と地を創造した』（創世記 1:1）神は、この『初めに』の前から存在しておられた。創世記 1:1 における『初めに』はあくまでも人間の側からの『初めに』である。単なる「世界の歴史のはじめ」ではなく、神の人類に対する愛のみわざの始まりであり、そのご計画とご意思を具体的な行動に移された特別な時を意味している。キリストもまた神とともに、この『初めに』の前に存在しておられた。

（ヨハネ 17:5、24）三位一体の神の愛の交わりは、人類の歴史の始まる以前からすでに実現していた。

聖書は、この世界を、栄光に満ちた、尊厳ある神ご自身がお造りになったと宣言している。世界の存在や生物の生息は偶然の産物ではない。尊厳とご威光に満ちた神が、ご自身の深いご計画と慈愛に基づいて、この世界を英知の限りを尽くして、創造された、と聖書は宣言している。だから、この世界は神の英知で溢れており、神のご性質に至るところで反映させている。神は秩序の神であり、そこに混乱はなく、美しさで満ち溢れ、不思議な規則を保ち、驚くような神秘に包まれている。同時に、至るところで神の慈愛を覚えることもできる。『天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる』（詩篇 19:1）

信仰の目をもってこの世界を観察するとき、現代人が「偶然」によって必死に神の存在を否定しようとすることの困難さを思わされる。誤った結論は、人間の尊厳を失わせ、生きる意味も、存在の理由も見失わせ、やがて人を絶望へと誘うことになる。慈愛に富み、栄光と尊厳に満ちた神が、英知と知恵を用いて、責任をもって私たちを存在させ、世界を創造された。それゆえ、私たちの存在に特別な意味がある。

1 - 2 創造の7日間^{[4] 10-11}

1日目：太古からの闇を押し分け、光が創造された。(創世記 1:3-5)

2日目：水が上の水と下の水とに分けられた。(1:6-8)

3日目：地が現れ、植物が現れた。(1:9-13)

4日目：太陽、月、星に、それぞれの役割が与えられた。(1:14-19)

5日目：水中の生き物と空を飛ぶ生き物とが造られ、繁殖するようにされた。(1:20-23)

6日目：地上の動物と人間が造られ、繁殖するようにされた。(1:24-30)

7日目：6日間にわたる創造のわざの後、神は休まれた。

1 - 3 人間の創造^{[3] 48-59}

『さあ人を作ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように』(1:26) これまでの神のことは、創造のみわざのための「直接の命令」か「祝福の言葉」だった。ところが、人間の創造に至っては、ご自身の意思を表明しておられる。これまでの創造が人の創造のための準備であったことを明らかにしている。

神のかたち^{[1] 27-28}

神のかたちとは人を動物と区別し、神との類似性を持たせるあらゆる人間の資質や能力を指す表現ではないだろうか。ではそれは何だろう。第一に、私たち人間は、理性的であり、自意識を帯びている。第二に、道徳的であり、良心をもっている。それにより、なすべき正しいことをするようにと心の促しを受ける。第三に、創造主に似て私たちは創造的であり、美しいものを目や耳で味わい楽しむことができる。第四に、社会的であり、互いに真実の愛に基づく関係を樹立することができる。神が愛であり、その神のかたちに人は造られたので、私たちは神を愛し、人を愛する愛が与えられているのである。第五に、霊的な機能を帯びているので、私たちは神を慕い求める者とされている。このように人は他の動物とは違い、思考し、選択し、創造し、愛し、礼拝することができる。

人は男と女に創造された(創世記 2:18、21-22)^{[1] 39-42}

創世記1章の記事では6回も繰り返して『神はそれを見て良しとされた』と記述され、最後には『神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった』と結ばれている。けれども、ここで突然『良くない』ものが登場する。『人が、ひとりでいるのは良くない』女性がいないければ、男性は不完全なのだ。神はアダムにパートナーを与えるとお決めになった。創世記2:18を結婚についてだけ適用するのは誤りである。カルヴァンは、この箇所を広い意味で読み取り「人は孤立しているのはよくない」と説明した。神は人を社会的な存在としてお造りくださった。友情は神からの尊い贈り物である。

エバがアダムの脇腹から取られたことに、注解者たちは象徴的な意味を読み取ってきた「エバは男の上に立つように頭から取られたのではなく、男に踏みしだかれるようにと足から取られたのでもなく、男と対等であるように脇腹から、保護されるようにとその腕の下から、愛されるようにと心臓の近くから、取られた」(M・ヘンリー)結婚は、人間の発明ではなく、神のお考えによるものである。1662年祈禱書の結婚式の序文にあるように、結婚は「人に罪が入る前から神ご自身により定められた」のである。

1 - 4 安息日^{[1] 30}

神による創造の冠は、神が安息日を設けてくださり、7日目にその働きを休んで礼拝をするようにとお命じになったことである。『神のご計画はホモ・ファーベル(道具を持って働く人)を造ることだけでなく、ホモ・アドランス(礼拝する人)を造ることであった。だから人は神を礼拝する時こそ最も気高い姿を示すのである』(ジョン・ストット)

1 - 5 墮落 ～ 罪とその結果 ～ [1] 37-38 [3] 99-112 [4] 13

神はアダムに簡潔で明確な指示をお与えになった(創世記 2:16～17)。肯定的な指示は自由を与える許可であった→「園のどの木からでも思いのまま食べてよい」。否定的な指示は禁止事項であった→「園の中央にある善悪の知識の木からは取って食べてはならない」。善悪の知識の木の存在は自由の象徴でもあり、自らの意思をもって神への愛と服従を示す機会を提供してくれていた。神は人の自由な意思としての応答を求めておられた。人が自律的になって、善悪を自分で判断し、神を必要としなくなっていくことを選ぶのではなく、神との交わりを求めて、神にあらゆる判断を委ねる存在として生きることを求められたのである。しかし、ある時、狡猾な蛇(サタン)がエバに近づき、誘惑をした。サタンは巧妙にエバを欺いた。サタンは神の言葉を曲げ、ついにはその言葉を否定した。エバはサタンに欺かれ、『あなたがたは決して死にません』という安全の保証、『あなたがたが神のようになり』という繁栄の約束に惹かれて、善悪の知識の木の実を食べてしまう。その実を食べたエバは、共犯者を求め、それを一緒にいる夫にも与えてしまう。人はこの時から罪人となった。人類の先祖アダムとエバから生まれてくる人はみな、罪の性質を受け継いで生を受けることになった。罪とは、神に背くことであり、神に御言葉の否定である。

墮落の結果、エバには、出産の苦痛が与えられ、夫婦関係には緊張が生まれた。アダムの人生では、労働が苦痛となった。また、予め告げられていた通り「死」が定められた(霊的な死、肉体の死、永遠の滅び)。さらに地球は、人間の罪が自然環境に影響を及ぼすようになったとき、呪われてしまった(3:17)。新約聖書によると、世の終わりのイエスの再臨の時まで、様々な事物は悪くなり続ける(ローマ 8:20-21)。

1 - 6 『あなたはどこにいるのか?』創世記 3:8～9

罪を犯したアダムとエバはエデンの園の木の間を身を隠したが、神は、2人を捜し、求め、御声をかけられた。『あなたはどこにいるのか?』聖書の歴史は、人の罪の歴史である。それと同時にその罪人を諦めない神による救いの歴史である。罪を犯した人間を、神は捜し続け、求め続けてくださる。『あなたはどこにいるのか?』という声が、創世記から黙示録に至るまでのすべての書簡で響き渡っている。聖書は、人が神を求めた探求の書ではない。神が人を愛し、救おうと、捜し求めてくださった歴史なのである。

1 - 7 最初の福音 ～ 神の恩寵 ～ [1] 53-54

神による蛇への裁きの宣告の中に「最初の福音」が含まれている(3:14-15)。神は、蛇に属する者たちと女の裔との間に敵意を置くと宣言された。この争いはエバの子孫の勝利で終わることになる。神の御心にあったのは一人の勝利者の存在であった『彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく』。彼は傷つくが、蛇に致命的な一打を与える。悪魔に対する、痛みを伴いながらの完全な勝利は、十字架上のキリストの勝利を指し示す。キリストにより人はサタンの縄目から解き放たれる。

神は恥でいっぱいの人を憐れみ『アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった』(3:21)。皮は動物を殺して後に初めて手に入るものである。ここには、他の箇所にも教えられているような、人の罪が赦されるのはただ犠牲の血が流されることによるとの教えが含意されているのだろうか。はっきりしているのは、神が、アダムとエバが自ら身につけたイチジクの葉に代えてご自身が直接仕立てた皮の衣を提供することによって、2人が自分で用意したものよりはるかによいもので覆おうとなさったという事実である。人には不相応な、神のこの主導権こそ、恵み・恩寵と呼ばれるものなのである。

1 - 8 社会性の崩壊 [1] 56

創世記 4～11 章には、農耕や建築、技術、音楽といった人間の文化が美しく花咲き始めているさまを見て取ることができる。一方で、4 章には人類史上最初の殺人事件が記されている。また 11 章に至るまでの記述には、社会的な状況が急速に崩壊していくさまも描かれている。怒り、嫉妬、傲慢、暴力、恨み、復讐、恐怖、自己憐憫などが次々と噴出し、洪水とバベルの塔における神のさばきで頂点に達している。

第2章 約束の民 ～ 創世記 ② 族長時代 ～

2-1 アブラハムの召命 ～ イスラエル民族の選び ～ [2] 22~25

旧約聖書の背景をなしているイスラエル民族の歴史は、創世記 12 章に記されているアブラハム（アブラム）の召命に始まる。墮落した人類を見捨てることなく、彼らを罪から救い出そうとする神の御心と救いのご計画が、このアブラハムの召しという出来事によって、はっきり示されるようになる。アブラハムの召しは、神が彼に約束を与え、彼と契約の関係に入られることによって遂行された。（創世記 12:1-3）

「信仰の父」と呼ばれたアブラハムの信仰は、神の約束を堅く信じ、契約に対して真実に行動したことにうかがえる。アブラハムも人間であり、ときには疑い抱き、揺らぐこともあったが、そのたびに神は彼に現れ、約束を思い出させ、契約を更新することによって彼の信仰を呼び覚ましてくださった。

アブラハムの信仰ならびにアブラハムから始まるイスラエル民族の信仰は、契約を土台にした「神とアブラハム」「神とイスラエル」という人格的な結びつきを特色とするものである。この人格的な結びつきを基礎にして、神は彼らの歴史を導き、彼らに語りかけつつ、契約を成就するためのみわざを遂行させる。聖書の示す神は、イスラエルの歴史を通して、ご自身の目的と計画を実現していかれる「歴史の主」なのだ。

2-2 イスラエルの歴史＝救いの歴史（聖書の中心的な流れ） [2] 27~30

『あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです』（ヨハネ 8:56）神がアブラハムに約束されたことは、いつ、どのように成就したのだろうか。『あなたを大いなる国民としよう』という約束は、出エジプトの時に一応は成就したように思われる。さらに、ダビデによるイスラエル王国の成立によって、この預言はいつそう確実に成就したとみることができる。しかし、『地上のすべての民族は、あなたによって祝福される』という預言は、旧約聖書において成就を見てはいない。その預言が成就したのは、イエス・キリストの来臨によってである。アブラハムの召命に端を発するイスラエルの歴史は、彼らによって地上のすべての民族に救いの恵みが及ぶためのものであった。アブラハムを召し、イスラエルを選ばれた神は、彼らの歴史を通して、人類を罪から救う恵みの契約をたて、それをイエス・キリストによって実現に至らせてくださった。イスラエル民族の歴史は、イエス・キリストの来臨によって実現を見る救いの歴史に他ならない。

聖書の中心的な流れ。この流れは、イスラエル民族の歴史における重要な出来事を通して、いろいろな意味を含みながらその内容を深め、ついにキリストの来臨による救いの実現に至る。このことを最も明白に示しているのが、マタイの福音書の冒頭にある系図である。

2-3 子孫に受け継がれていく約束と信仰

イサク

子孫に対する約束がアブラハムに与えられたとき、アブラハムと妻サラとの間には子どもがいなかった。アブラハムが召されたのは 75 歳の時であった。サラは 65 歳であり、不妊の状態であった。約束を受けてからしばらく経過しても 2 人の間に子どもが生まれる気配はなかった。それでも神はアブラハムとサラの間に子どもが生まれると約束をされた。99 歳の時、その約束が明確に告げられた。そしてついに約束の時が来て、100 歳のアブラハムと 90 歳のサラの間にイサクが生まれた。疑いの笑い（イサク）は祝いと喜びの笑い（イサク）に変えられた。

イサクは神の導きのもとで、アブラハムの親族の中からリベカを妻として迎えた。しかしリベカはその後 20 年間妊娠することがなかった。イサクは妻のために祈り、やがて双子が生まれた。リベカは神に、子どもたちの将来について尋ねた。神の答えは、「2 つの国民があなたの中にいる、兄が弟に仕えること

になる」というものであった。アブラハムからイサクに受け継がれた約束は、長子エサウによってではなく、弟ヤコブによって実現することになるというのである。

ヤコブ

ヤコブは、神の約束を知っていたが、神に信頼して待つのではなく、自らの知恵と力で約束の実現を図った。ヤコブは策略家であった。ヤコブは兄と父を欺いたことにより、父の家を出なければならなくなった。ヤコブは、母リベカの兄ラバンの実家のあるパダン・アラムに行き、そこで（図らずも）2人の女性を妻として迎えることになった。レアとラケルと2人の女奴隷は、後のイスラエル12氏族の祖先となる子どもたちを生んだ。かつて怒りを買った兄エサウとの再会を意味する故郷カナンへの旅の途中、ヤコブはヤボクの渡りで、神との出会いを経験する。ヤコブはものつがいを打たれ、神からの祝福を受け、その名をイスラエルと変えられた。いわゆるペヌエル（神の御顔）での経験である。

ヨセフ

ヨセフはヤコブの11番目の子で、ラケルから生まれた最初の子であった。ヨセフは異母兄たちよりもヤコブに愛され、兄たちから憎まれることになった。兄たちはヨセフをイシュマエル人に売り、イシュマエル人はヨセフをエジプト王ファラオの侍従長ポティファルに売った。こうしてヨセフは異国の地で奴隷となった（当時17歳）。兄たちは父ヤコブに「ヨセフは野で獣に殺された」と報告した。

ヨセフは、ポティファルの家で奴隷として仕え、また濡れ衣を着せられて牢獄に入ることになったが、主がともにおられたことにより、置かれた場所で成功を収め、管理者としての立場を得た。30歳の時、ファラオの夢を解き明かしたことにより、ヨセフは牢獄から釈放され、エジプトを治める大臣となった（ヨセフの奴隷・囚人としての生活は13年間）。豊作の7年を経験した後、飢饉の2年目に、父より遣わされた兄たちと22年ぶりの再会を果たすことになった（39歳）。兄たちはエジプトの管理者がヨセフであるとわからずに、かつてヨセフが見た夢の通りにヨセフにひれ伏した。ヨセフの指示により（また主の導きにより）、ヤコブ家のすべての者が、エジプトに移住することになった。創世記46:27によると、エジプトに移住したヤコブの家族は70人であった。

ヨセフの物語を通して教えられることは「主の摂理」である。ヨセフは自分を奴隷として売った兄たちに神の救いのご計画を証しした。『あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした』（50:20）『だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです』（45:8）

2-4 創世記から出エジプト記へ^{[1] 80}

創世記は、エジプト寄留中に起きた2つの死をもって幕を閉じる。第一はヤコブの死である。ヤコブは死んだ後にカナンの地に戻され、アブラハムが家族の基地として購入したヘブロン近くのマクペラの洞穴に葬られた。次いでヨセフもエジプトの地で死んだが、その際に二重の確信を抱いていた。やがて時が来て、神がこの民を約束の地に戻してくださること、そのとき皆が自分の遺骨を携えて家族の墓地に葬ってくれること、である。『ヨセフは兄弟たちに言った。「私は死のうとしています。神は必ずあなたがたを顧みて、この地からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地へ上らせてくださいます。」そして、ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、「神は必ずあなたがたを顧みてくださるから、そのとき、あなたがたは私の遺体をここから携え上げてください」と言った』（創世記50:24-25）ヨセフもヤコブと同様、自らの遺体を約束の地カナンに葬ってほしいと伝えた。神の約束とヤコブの意思はヨセフへと受け継がれた。ヨセフもまたその信仰を次の者たちに引き継ごうとした。

ヨセフの『神は必ずあなたがたを顧みてくださるから』という言葉は創世記から出エジプト記への橋渡しの言葉である。この言葉はモーセ、ヨシヤの時代に実現する。

第3章 約束の地に向かって ～ 出エジプト記から申命記 ～

3-1 出エジプト記^{[4] 26}

創世記の終わりから出エジプト記の初めまでには 430 年の時が経過しており、エジプトでは新しい王朝が起こった（出エジプト 1:8）。ヨセフの存在も彼の貢献を知らないエジプト人は、ヨセフの子孫に対する態度を変えた。人口を増していくイスラエル人に脅威を覚えたエジプト人は、イスラエル人を奴隷にした（民数記 1:46 によると出エジプト時のイスラエルの人口は二十歳以上の男子だけでも 60 万人に達していた）。労役は激しさを増し、イスラエルの民は神に叫び求めた。すると『神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた』（2:24）。

3-2 モーセの召命^{[2] 32-33 [1] 81-83}

神はアブラハム、イサク、ヤコブとの間に結んだ契約を思い起こし、イスラエルの民が「大いなる国民」となるように、指導者を立てて彼らをエジプトの奴隷から救い出された。その指導者とはモーセである。

モーセは、イスラエルの民であったが、不思議な導きの中で、実の母の手によって、次いでエジプト王ファラオの娘によって育てられた。『信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました』（ヘブル 11:24～25）。モーセは自分が育ったエジプトの側ではなく、神の民の側に立つことを選んだ。しかし、モーセの同胞への愛は称賛すべきものであったが、彼のとった行動は無謀であった。モーセはヘブル人を打ちつけているエジプト人を殺してしまった。そのことがすぐに知れ渡ったため、モーセはミデヤンの地（シナイ半島）に逃れることになった（当時 40 歳）。その地での忍徒の日々は 40 年に及んだ。

ミデヤンでの 40 年の終わりに、モーセはホレブの地のシナイ山のふもとで神からの召命を受けた（3 章）。神は燃える芝の中からモーセに語られ、イスラエルの民をエジプトから導き出すようにと指示された。しかし、モーセは最初、その使命を追うことを拒んだが、兄アロンとともにエジプト王ファラオのもとに遣わされていくことになった（当時 80 歳）。

3-3 十の災いと出エジプト^{[5] 23}

ファラオがイスラエルの民を奴隷から解放することを拒んだため、神はファラオの頑なな心を砕き、エジプトの異教の神々を遥かに凌ぐ御力を示すために、エジプト人の上に十の災いを送られた。これらの災いは 9 ヶ月の間に、下記の順序で発生した。これらの災いの後に、ファラオはイスラエルがエジプトを出て行くことを許可した。イスラエルはアビブの月の 15 日にエジプトを主発した。

- (1) ナイル川が血に変わった（7:14-25）
- (2) 蛙が街中に繁殖した（8:1-15）
- (3) 人や獣にぶよが寄生した（8:16-19）
- (4) あぶの群れが地を覆った（8:20-32）
- (5) 疫病がアジプト中の家畜を殺した（9:1～7）
- (6) うみのでる腫物が人や獣を襲った（9:8～12）
- (7) 雹がすべての穀物と豊作物を打った（9:13-15）
- (8) いなごの大群が大地を覆った（10:1-20）
- (9) 真っ暗闇が三日間エジプトを襲った（10:21-29）
- (10) エジプト全土の初子は人間も動物も殺された（11:1-12:30）

3-4 主の過越し^{[1] 85-86}

10 番目の災いに関して、神は明確な説明と指示をお与えになった。真夜中に神がさばきのためにエジ

プトを過ぎ越される。そして社会のどの階層であれ初子は必ず死ぬ、というのである。しかし、イスラエル人は、一家族ごとに一頭、傷のない一歳の羊を屠り、その血を家の門柱とかもいとに塗るならば助かる。家の外に出てはならなかった。その夜、神がエジプトを過ぎ越されるからである。神は小羊の血を見るならば、その家を過越し、初子は守られる。この過越しの祭りは、イスラエルの暦で一年の最初となるべきであり、毎年祝われるべきものとされた。

「主の過越し」には新約聖書で明らかにされる「贖い」の概念、「小羊キリストの血による身代わりの十字架」「信仰義認の教理」が鮮やかな象徴として描き出されている。

3-5 シナイ山での祝福 ^[2] 33 ^[1] 88-89

モーセに率いられてエジプトを脱出したイスラエル人は、途中、いろいろな困難に出会いながらも神の奇跡的な力に守られて葦の海(紅海)を渡り(出エジプト 14-15章)、天からのマナをいただき(16章)、シナイの荒野を旅してシナイ山のふもとにたどり着いた。

『全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる』(19:5-6) イスラエルがシナイ山に到達するまでは3ヶ月かかった。ひとたび山の麓に宿営してからは1年あまりそこで過ごした。この地で、神はご自身が贖った民に3つの貴い贈り物をお授けになった。

(1) 契約の更新: 神は族長たち(アブラハム、イサク、ヤコブ)に繰り返し現れ、契約を確認された。出エジプトの出来事が起きたのも、神がこの契約を覚えておられたからであった。異国での生活が終わり、約束の地が迫ってきた今こそ、契約を再確認し、更新する時であった。『あなたがたは、わたしがエジプトに対してしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に載せ、わたしのもとに連れて来たことを見た。今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の中であって、わたしの宝となる』(4-5節)

(2) 神はイスラエルに道德律法をお与えになった。道德律法とは、神と契約を交わしたイスラエルが守るべきおきてである。その中心に十戒があり、十戒を補う細則としてその他の定めがあった。

(3) 神は、たとえ律法違反があってもそれを埋め合わせる手段を寛大にも講じてくださった。それは、幕屋の建設であり、様々の犠牲の定めであり、それらの執行者としての祭司の任命である。

3-6 荒野の旅 ～ 民数記・申命記 ～ ^[1] 90-91

『私たちは、主があなたがたに与えると言われた場所へ出発するところです』(民数記 10:29) イスラエルの民が約束の地に向けて旅立つ瞬間は、大きな興奮に包まれたことだろう。神がアブラハムに最初の約束をしてから、おおよそ7世紀もの年月が経過していた。しかし民の期待はすぐに潰えた。各部族から1人ずつ選任された12人の偵察隊は、カナンの地はまさに乳と蜜の流れる地であることを証しする豊潤な果実を持ち帰ったが、ヨシュアとカレブを除く10人が、その地の住民は強大であり、そこに入っていくことは不可能であると報告をし、民の心を挫いた。このつまずきは決定的であり、この世代の者たちは、信仰を持って立ち上がろうとしたヨシュアとカレブを別にして、約束の地に入ることができなくなり、エジプト脱出からカナンに入るまでに40年の歳月を荒野でさすらいることになってしまった。

ついに40年の歳月は終わりを告げ、その間にかつての世代はすべて死に絶えた。今、イスラエルの民はモアブの平地に宿営していた。ヨルダン川が死海に注ぐあたりから少し北東に行った地域である。その地でモーセは民に向けて最後の説教をした。この時の説教は申命記に記されている。モーセはイスラエルがこの40年程に経験した歴史とその意味とを詳細に語り、約束の地を所有するに際しての準備をさせようとした。モーセの説教の強調点は、ヤハウェとその民とが互いに結び交わした愛の契約である。ヤハウェはこの民を愛し、選んでくださった。モーセは語った。あなたがたに何か長所があったからではなく、ただ神は愛してくださったのだ(申命記 7:7-8)。だから今度は、あなたがたが自分のすべてをもって神を愛さなければならない。その愛を、主に従うことで表さなければならない(申命記 6:4-9、10:12-13)。